

# 風景と形の翻訳

-益子町の開かれたケア空間-

## 01 Introduction

私は助産院・薬局・小児科を含む子どもを町で産み育てていくための社会インフラとなる建築を設計した。

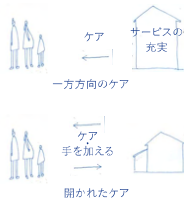
### ・生まれる風景と形

敷地である益子町にはモノづくりを支える地域に根付いた風景や形がいくつもある。ここ益子では陶芸家濱田庄司が晩年の作陶場所として選んだ地であることは有名だ。そんな濱田は陶芸に対し、こんな言葉を残している。「作ったというより生まれたというような品が欲しい」。私が益子で見た興味深い風景や建築、土地はまさにつくられたというより生まれたという言葉がピッタリと合うそんな風景ばかりであった。



### ・開かれたケア空間

そうした土地と人の手によって時間をかけて生み出された風景や形を用いたケア空間を考えてみたい。昨今のケアに対する関心の高まりもあり、ハードとしての建築でもサービスの充実したケアの場を作る実践がいくつかある。しかし、そうしたサービスの充実に建築が加担しすぎることでは建築にケアされるだけという一方的な関係性になっていないだろうかと感じる。私が益子で見てきた風景はモノや、出来事がそれぞれ等面に存在し、建築が使いこなされる状態、まさに人によって建物がケアされるような印象を受けた。そうした建物と人がケアする/されるという関係が絶えず変わり続ける開かれた空間こそケア空間に必要なのではないか。



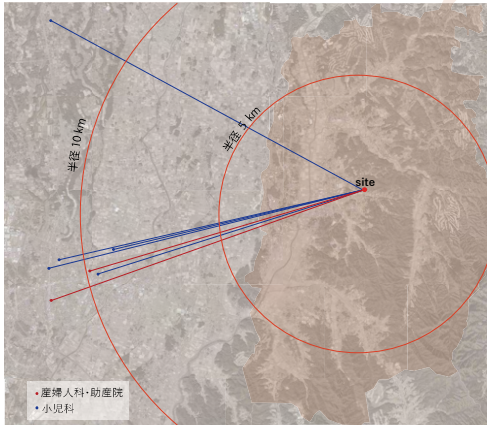
## 02 Site・Program

### ・社会インフラとしてのケア空間

町では空き家バンクやお試し住宅、子育て支援金など若い世代への移住者支援に力を入れている。一方、ヒアリング等のリサーチにより、小児科や子供を産むための場所が町内になく子育て世代が困っていることが明らかになった。

町を活性化するために若い世代を呼ぶための金銭的な政策は掲げるものの、実際にそこで生活を営んでいくための空間が欠けているという実態は益子だけの問題ではなく日本の様々な地方都市が抱えている問題である。

こうした町の抱える問題と実態のギャップを解消するため、助産院、放課後児童スペース、小児科、薬局、直売所の機能を持った日常的かつ持続的な子育てを行える社会インフラとしてのケア空間を提案する。



益子町と既存の産婦人科小児科の位置関係車で30分圏からわかる。

## 03 Translation

### ・益子の風景と形を翻訳すること

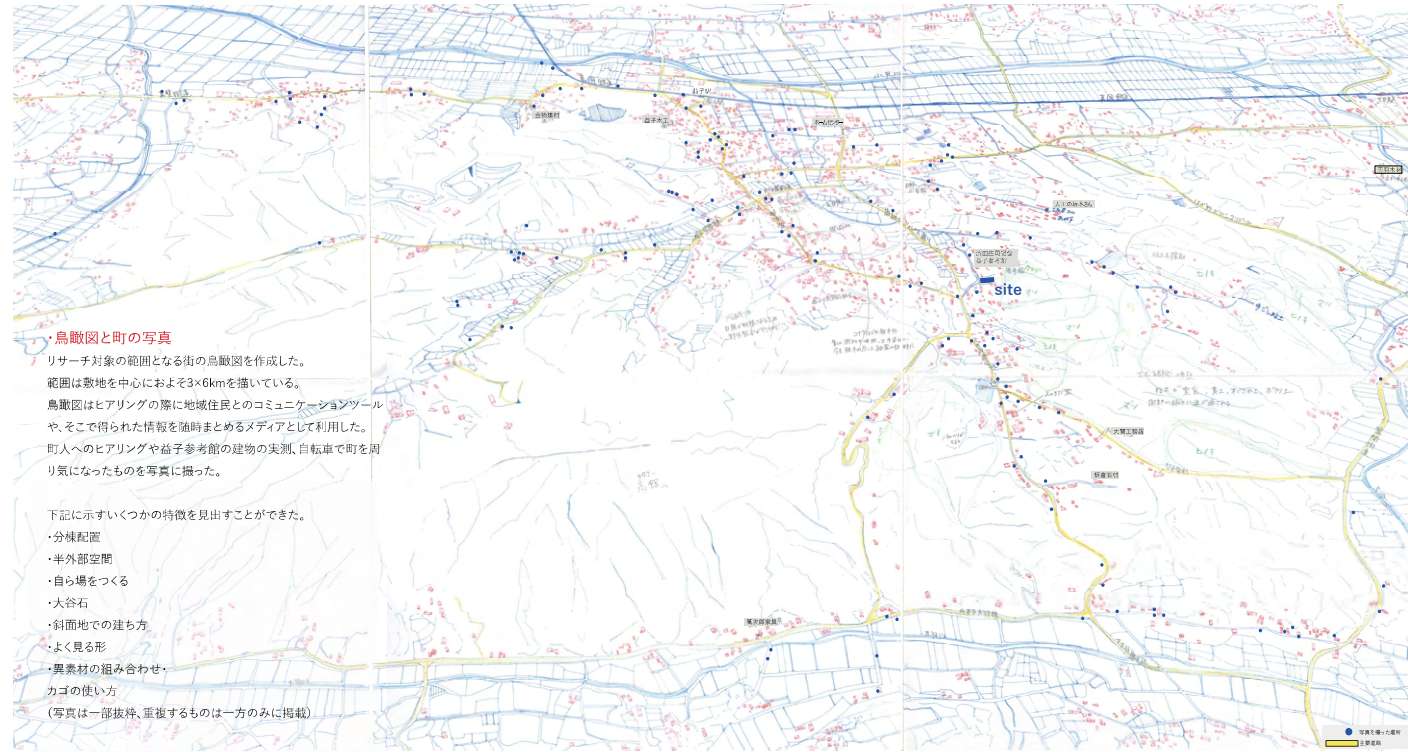
益子はいわずと知れた陶器の街であることから、現在でも陶器の街ならではの独特の建築形式が見受けられる。一方、この場所らしさを代表するようなモノばかりでなく、外でくつろぐために住宅につけられた半外部空間やお皿を乾かすために付けられた竹の棚のような、そこでの営みを想像させるような豊かなモノたちにも出会った。こうした自分たちの力で持続的に土地や建物に関わり続けることは、制度やサービスといった社会的な拘束から建築を開いていく契機にならないだろうか。本設計ではケアというサービスや制度の充実が求められる機能に対し、益子の風景や形をケアの空間へと翻訳することで「開かれたケアの空間」を設計する。



お皿を乾かすための棚 外でくつろぐためにつけられた半外部空間



## 04 Research

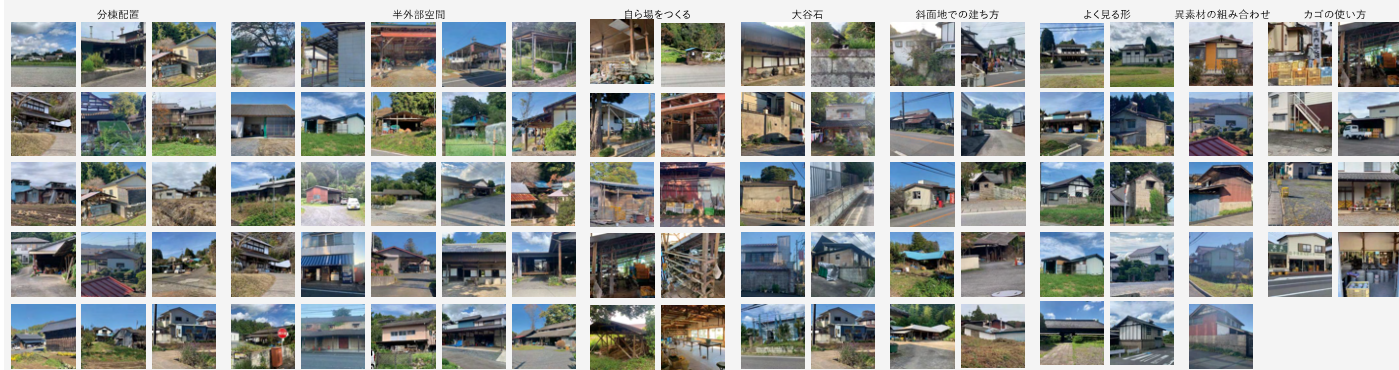


### ・鳥瞰図と町の写真

リサーチ対象の範囲となる街の鳥瞰図を作成した。範囲は敷地を中心におよそ3×6kmを描いている。鳥瞰図はヒアリングの際に地域住民とのコミュニケーションツールや、そこで得られた情報を随時まとめるメディアとして利用した。町人へのヒアリングや益子参考館の建物の実測、自転車で町を周り気になったものを写真に撮った。

下記に示すいくつかの特徴を見出すことができた。

- ・分棟配置
  - ・半外部空間
  - ・自ら場をつくる
  - ・大谷石
  - ・斜面地での建ち方
  - ・よく見る形
  - ・異素材の組み合わせ
  - ・カゴの使い方
- (写真は一部抜粋、重複するものは一方のみに掲載)



①シーンの書き出し

プログラムから得られるシーンでは、時間的や、周辺的な、使う人やこの場所で働く人などから考えられるシーンをスケッチにした。

助産院と直売所



子ども・多目的スペース



薬局

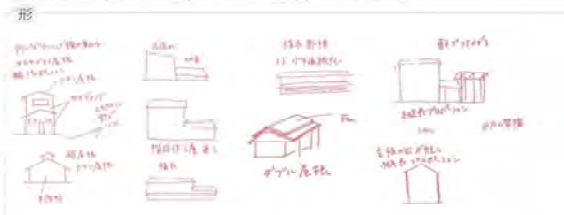


小児科

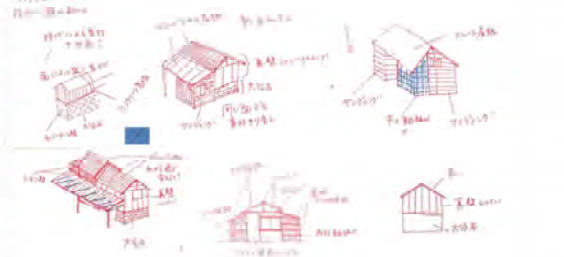


②形や風景のスケッチ

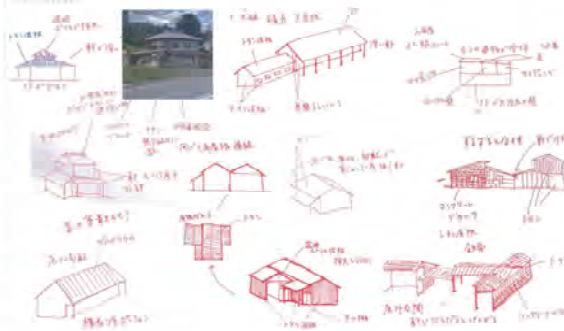
町の形や風景は写真やスケッチを用いながら現地でみたものの分析を行った。



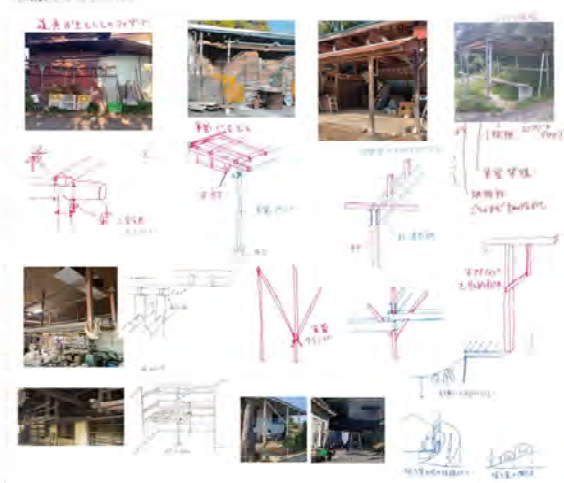
素材



形と素材

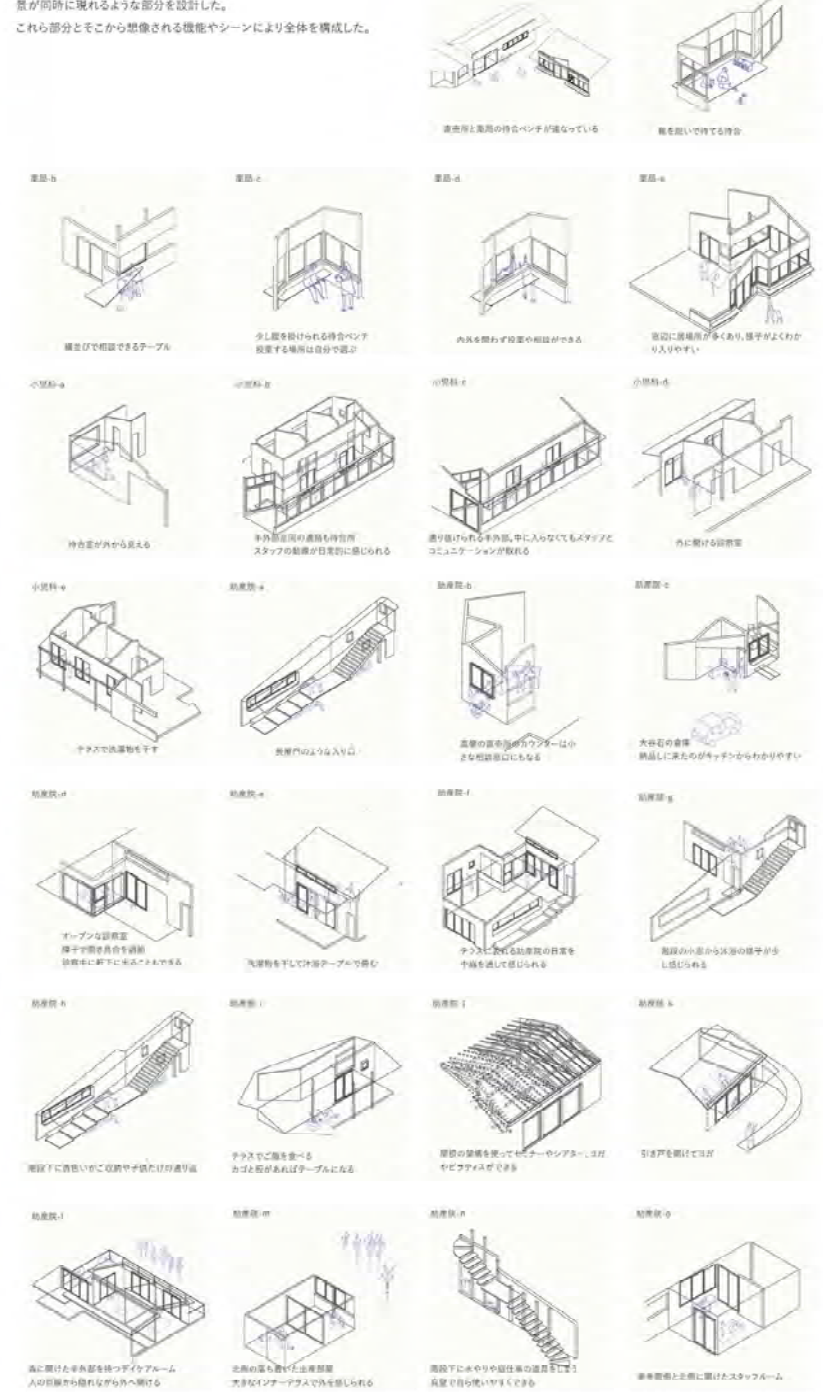


風景やディテール



③部分の設計

①と②になる2つの出どころを持ったものを重ね合わせながら、ふるまいと風景が同時に現れるような部分を設計した。これら部分とそこから想像される機能やシーンにより全体を構成した。



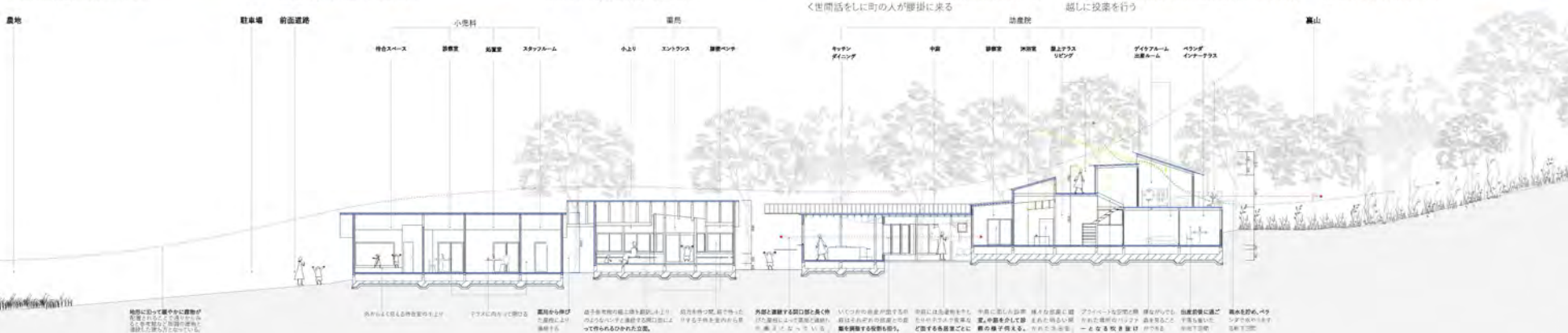
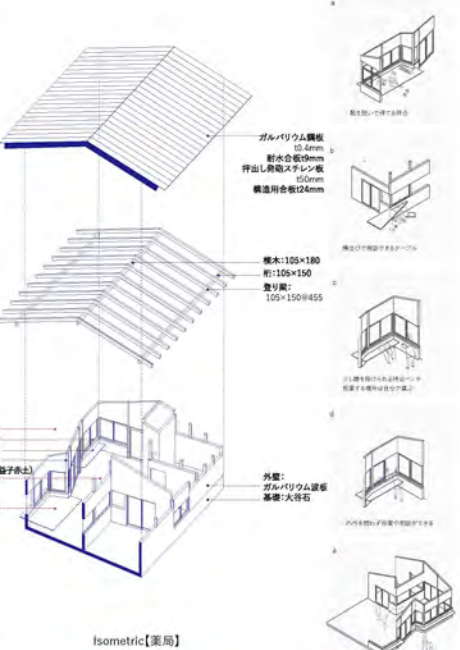
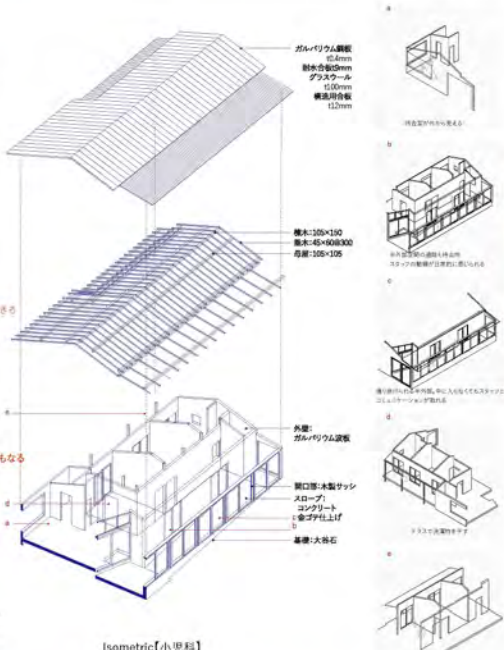
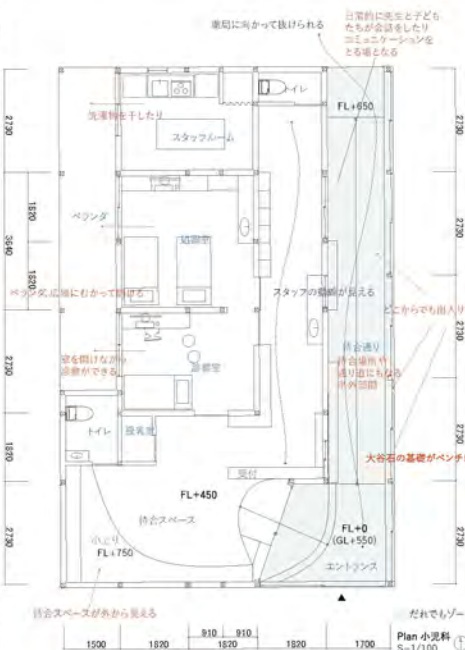
敷地は高田庄司記念益子参考館の東側に位置する。主要道路から少し奥まったところに位置し北側には森が広がる。敷地を東西側の開けた広場と北東(御森側)の時かな広場の斜め二つに分割し、森に近い北側から助産院、直売所、薬局、小児科と配置をした。

小児科

敷地の一番南、前面道路に近い場所に位置している。駐車場に面する東側にはバッファーとなる木製建具の半外部空間が連続し、西側の庭側には処置室や診察室といった空間が並び、東西で異なる半外部空間をもつことで異なる開き方をしている。これは益子の1つの建物に複数の異なる質の半外部空間を持つ風景をリアレンジしている。小児科という内部に閉じられがちな機能を益子の多様な半外部空間を用いることで医療を提供するだけではない日常的なかかわりやケアをきっかけになることを期待している。

薬局

小児科と助産院をつなぐ場所に位置する。西側には深い軒と水平に連続する窓、内外には小上りやベンチを設けている。葺子の陶器において窓の製作と乾燥が行われる細工場は意匠に産つて作業をするため張られた板の間が張られている。これを多様な持ち方を可能にする葺子の待合ベンチへと翻訳を行った。木製の引き違い窓を自ら開け閉めすることで内外を問わず投薬を行える。外部に設けたベンチは薬局の待合だけでなく直売所や薬局との関係を持つきっかけにもなる。

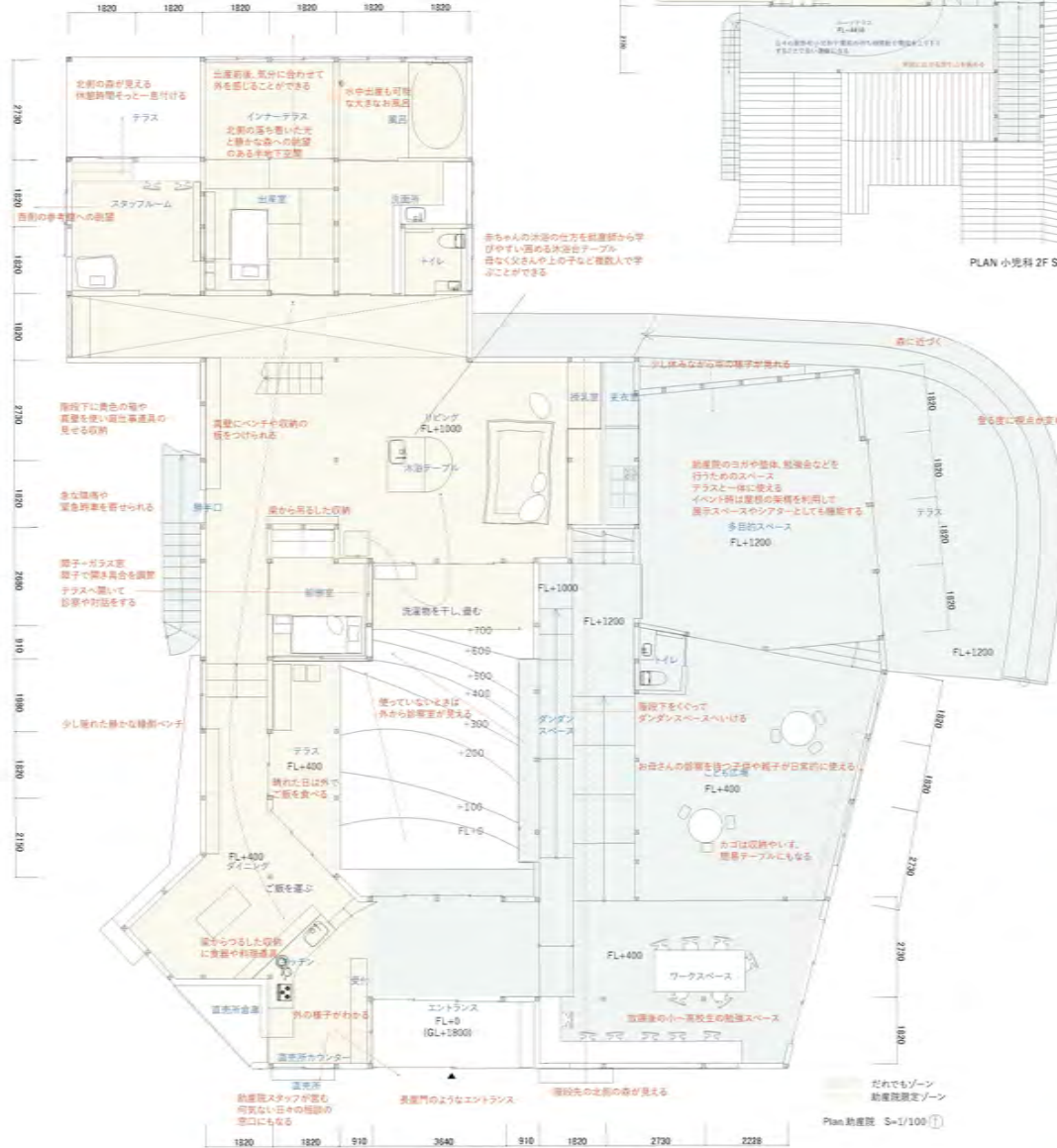


敷地に沿って緩やかに建物が配置することで建物の存在感を弱くし、周囲の環境に溶け込むように設計した。また、建物の配置によって、敷地の地形を活かすことで、建物と周囲の環境との関係性を高めることができた。

助産院

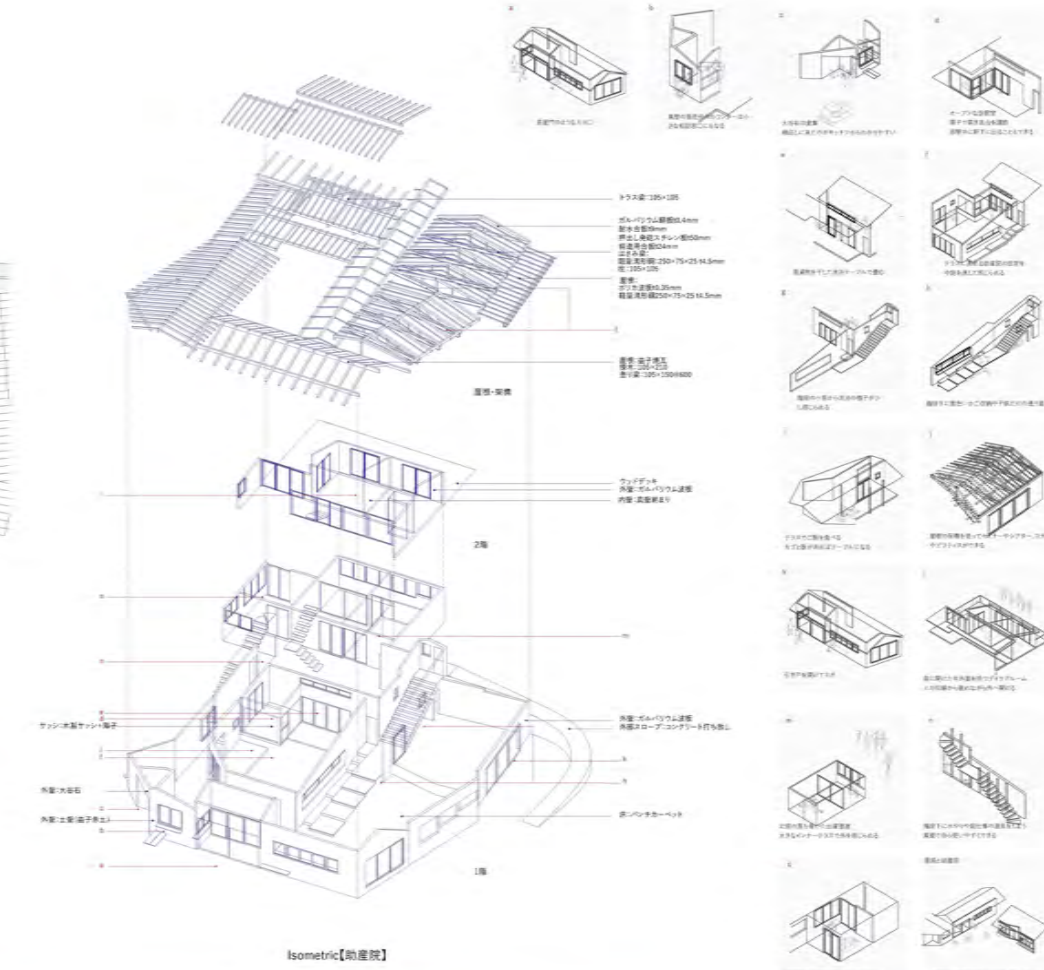
敷地の最も北側に建つ助産院。

益子参考館の長屋門のような大きなエントランスを持ち、中庭を囲むような形で全体が作られている。中庭の西側が助産院の機能、東側は出産者だけでなく子供や街の人々が訪れることのできる場所になっている。傾斜地の多い益子では斜面と建築での視線のずれや不思議な距離感を持つ風景があった。これらの風景とシーンに基づき助産院と街の人々や子どもが使うスペースをゾーニングを行い、より豊かなシーンをつなぎ合わせた。助産院の風景と東側の風景は中庭だけでなくスロープや階段の高低差を通して間接的にかかわりを持つことができ、助産院の働く人、妊婦さん、子供や、街の人たちが飽えず建築と関わり続けられるよう、立面や屋根の形式、家具のレベルで益子での風景や形が翻訳されている。木造の梁の表しや真壁にすることで益子ならではの梁への吊り棚や壁面収納など必要に応じてつけることができるよう、場所によって仕上げを実践している。



PLAN 小児科 2F S-1/150

Plan.助産院 S=1/100



Isometric【助産院】



キッチンからつながる直日光カウンター: 小さな相談所の役割も持つ



リビング: 沐浴の仕方を夫婦で学ぶ



多目的スペース: 築構を使ってオープンセミナーをする



リビングと診察室のテラス: テラスでの診察中に洗濯物を干す



キッチン上の吊り棚収納: 必要に応じて手を加えられる



北側立面: 静かな森に向かって開く